

---

# 今年もその日がやって来た！

針苑子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今年もその日がやって来た！

### 【Nコード】

N0643K

### 【作者名】

針苑子

### 【あらすじ】

バレンタインデーのお話です。

今年もダントツ1位であったであろうあの御方。

当然のように、そのチョコを食べさせられるラエスリールと、保護者会の面々のお話です。

**（前書き）**

甘い物が苦手なラエスリール。  
今年も嫌々「あの日」がやって来ました…。

毎年毎年、何の嫌がらせかとラエスリールは頭を抱えていた。

テーブルの上には綺麗にラッピングされたたくさんの箱が、山と積みまれている。

「はぁ……」

ため息ついて、渋々とその一つに手を伸ばした。

「あら、ラスったら。全っ然、減ってないじゃないの」

砂色の髪をした3才年上の捕縛師が、にこやかに声をかけてきた。他人の不幸は蜜の味。

毎度のことながら、サティンは実に嬉しそうだった。

「代わりに食べてくれないか、サティン」

言うだけ無駄と知りつつも、ラスは縋るような目つきになった。

「だめよ、そんなの。私が闇主に怒られちゃうわ」「私が甘い物を苦手なの、知ってるだろ？」

「よく知ってるけど、それが何か？」

「……」

くすくす笑うその顔は、可愛い妹分の苦行を楽しんでいるようだった。

何とも人が悪い。

毎年のことなので、ラエスリールは諦めて、手直にあった箱を一つ手に取った。赤いハート模様の包装紙を丁寧に剥がす。

蓋を開けると、甘い匂いが広がった。

意を決して、一つを摘み上げて口に入れた。

「……」

想像以上に甘い。

やっぱり苦手だ。

「大体、何で私が食べなきゃならないんだ？　これ、ほとんど闇主

宛てなのに…」

小さな一個をようやく飲み込んで文句を言い、ラエスリールは次の一個を摘んでは、ため息をついた。

「だって、闇主の物はラスの物でしょ？ いい加減、拗ねてないで、食べちゃいなさいな」

「拗ねる？ 私が？」

「あら、違うの？」

「何で私が拗ねなきゃいけないんだ？」

ラエスリールの相変わらな反応に、サティンはくすつと笑って答えた。

「自分の男がモテ過ぎるから、拗ねてるんでしょう？ ラスは」

「……？」

自分の男？

それって誰のことだ？

誰が誰の男なんだ？

それって、今この目の前にある……の山と、何か関係があるのか？  
ラエスリールは、心底わからない、といった顔でサティンの鳶色の瞳を見つめた。

そして。

「……えっ。それって……えええっ?!」

数瞬の間の後に、盛大にむせたのだった。

「サ、サティン！」

「何かしら？ ほほほ」

真っ赤になって抗議しようとして、ラエスリールはまたむせた。

「あらあら…。大丈夫ですか？」

ほっそりとした白い手が横合いから現れ、テーブルに紅茶のカップを置いた。

「あ、彩糸。…すまない」

優しく背中をさする手に、ラエスリールは徐々に落ち着いていった。

「姉ちゃん！ 今年の分、届いてるんだって？ 俺のは？！」

勢いよくドアが開くと同時に、騒がしい声が降ってきた。

「お行儀が悪いですよ、若様」

彩系が注意すると、ちろりと舌を出す。

乳白色の柔らかい髪が揺れる。

悪戯好きの子供のような人懐っこい藤色の瞳は、吸い込まれそうなくらい、深く澄んでいる。

「お生憎様。そんなの、あるわけないでしょ？」

一緒に入って来た金髪の少女が、「いーっ」と舌を出した。

「そんなはずない！ 俺、頑張ってるもんな？！」

同意を求めるように、一同を見渡すと、何故か誰も目を合わせてくれなかった。

「ほーら、見なさい」

勝ち気な顔に勝ち誇った表情を浮かべて、リーヴィが高らかに笑った。

「お前なー、ついこの前、助けられたくせに、よく言うよ！」

「あら、そんなことあったかしら」

「お、お前つてば、可愛くねえー！」

「な、何よ！ ベ、別に、助けてなんて頼んでないもの！」

「あつ、今言った！ 今、助けられたって認めたよな？！」

延々続きそうな掛け合いに、皆が生温かい微笑を送った。

「お二人とも……」

こんな日くらいは素直になって欲しいものだ、と思ったが、口には出さない彩系だった。

「大体、あんたはねえ……って、ちよつと邪羅！ ちゃんと聞きなさ

いよ！」

「あーっ!!」

リーヴィが何か言いかける言葉を遮って、邪羅が大声を上げた。

「姉ちゃん…。それ…」

震える指先が、ラエスリールの手に握られた……を見つめていた。

「え？」

言われて、ラエスリールは視線を自分の手元に落とす。

それから、ハツとなったように、包装紙に付けられたカードを見た。

「姉ちゃん…。それ、俺宛ての分…」

「邪羅、す、すまない…」

「貴重な一個だったのに…」

呆然となる邪羅と、申し訳なさそうに小さくなるラエスリール。

彩糸がそつとリーヴィに近づき、耳打ちした。

「今ですよ、リーヴィ」

「えっ？」

「今がベストタイミングだと言ってるんです」

「ええーっ、ちよっ、そんなの急に…」

「今を逃すと、渡しそびれますよ」

「だって…やだっ、たった今喧嘩してたのよ？ 何て言えば…」

「自分の気持ちを素直に言えばいいんですよ？」

ついつと背中を押されて、リーヴィは邪羅の真ん前に出た。

「あ、あのっ。邪羅っ！」

声が裏返っていた。

「何？」

藤色の若者の目は、どよんと落ち込んでいた。

「こ、これっ！」

真っ赤になって差し出す手には、薄紫の可愛い箱が握られていた。  
少々いびつに結ばれたリボンが、作り主の精一杯の思いを伝えてい

た。

「青春ですねえ」

のほほんとした声がした。

いつの間にか現れた万年青年セスランが、紅茶を片手に……の一粒を口に放り込む所だった。

「あの…それは、邪羅の分で…」

ラエスリールが困ったように言っていると、澄ました顔で返事を返す。

「形ある物はいつかは壊れます。形ある……は、誰かの胃袋に納まらなくてはなりません」

「……」

「まあ、本人がもう気にしてないみたいですし、いいんじゃないでしょうか」

皆の視線に飄々と答える、その先を見れば、ツンデレを絵に描いたような青春真つ最中の若い二人の姿があった。

…放つところ。

はあ……。

ラエスリールは、今日、何度目かのため息をついた。

「そう言えば、肝心の極悪大魔神はどうしたんです？姿が見えませんが…」

「ああ、ついさっきまで居たんだが…。また野暮用とか言って雲隠れだ。まだ半分しか食べてないのに…」

「えっ?!」

「まだ半分？」

「この量の?!」

皆が口々に驚きの声を上げた。

「いや、この量の半分じゃなくて、食べて残った分がこの量なわけ



で…」

ラエスリールが説明する。

「どっちにしても、すごい量じゃない？」

「よく食べれましたね…」

「胃袋が別の空間につながってるんじゃないの？」

「さすがは性悪大魔神ですね」

その場に居ない者のことは、何とでも言っていいたい。

「あ、あの、それって変なのか？ 涼しい顔して食べていたから…」  
皆の異常な反応に、ラエスリールが少し焦ったように言った。

「ま、まあ、心配要らないんじゃない？ あの御方のことだから…」

それより、さあ、食べるわよ」

「う……」

年に一度の乙女のビッグイベント。

うずたかく積まれたチョコレートの山を前に、ラエスリールの苦闘はまだまだ終わりそうになかった…。

（後書き）

邪羅がリーヴイを助けたと言っているのは、原作版の『鏡の森』のことです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0643k/>

---

今年もその日がやって来た！

2010年10月21日21時48分発行